

## 105 どんと祭の起原について

問 どんと祭の起原はいつか。

答 1月14日の夕方から15日の朝にかけて、大崎八幡神社の境内で、各戸で取りはずした門松や注連縄〔しめなわ〕を大勢の市民が持ち寄って焚く行事を、どんと祭といっています。この行事は昔は松焚祭〔まつたきまつり〕<sup>(1)</sup>といていたもので、どんと祭という呼び方は、明治の半ば以後、ジャーナリズムが関西風にとってつけたのが一般的になったのだといえます。このことを「仙台の年中行事」（仙台市産業部編。昭和15年刊）では『この松焚祭は〔藩政時代よりも〕今日の方が遥かに盛大である。次にドント祭と云ふ名称は明治以後上方風に付したジャーナリズムの過誤であるらしく、仙台では昔からマツタキ祭と云って居る』。そして「松焚祭」の名称は昭和になっても残っていたことが、『仙台』増訂版（小倉 博。昭和28年刊）の次の記事に見られます。『松焚祭 門松を取去り、夜、大崎八幡神社境内で焚く。どんと祭ともいふ。鈴を振りながら裸参りする人もある』。「どんと」という呼び名が、もともと東日本にはなかったものであることを、「年中行事辞典」（西角井正慶編）は次のように裏付けています。『とんど 主として小正月に行われる火祭の行事。爆竹の音や火勢を形容するどんど・どんどんなどということばの連想により、「とうどやとうど」というはやしことばをなまめて、とんど・どんど・どんど焼きなどと行事の名称とするようになったものであろう……トンドまたドンドと呼んでいるのは畿内〔きない〕から中国・四国地方が多く、中国地方では近畿<sup>(2)</sup>に近い諸県でいう。山梨県の一部でトンドというのは東の一応の境界らしく……』。また「日本祭礼行事事典」（宮尾しげを編）を調べても、正月の火祭行事を「とんど」と称しているのは、主として西日本に限られています。東日本では仙台にだけ「どんと」の語があるのは、飛び火的にと言うより寧ろ人為的に移入されたものであることが確実です。

仙台のどんと祭は、大規模な大崎八幡の境内だけでなく、方々の地域的に手近な神社や寺の境内等でも行われます。また、東北の他の地方で行われているように、昔ながらに自家の屋敷内で焼くことも稀にはあります。大崎八幡のどんと祭の起原を明確にする史料は皆無に近いのですが、それぞれ自家で焼いたのが火祭の原形であり、いつの頃からか防火と社寺繁栄の一策として、共同化・集中化が進められて今日の盛大さに至ったものようでもあります。「郷土の伝承」（宮城県教育会編）の中の「封内年中行事」の項で、昔の松焚祭のことについて次のように述べています。『正月十四日 この日七五三縄〔しめなわ〕松飾を取り払ふて之を清浄の処に集める。……先づ小豆粥を煮て神に捧げ取りはずした松飾に捧げる。それから家内起き揃って睡眼をこすりながらも之を食する。終れば松飾りを地の明神などに納める。仙台では十四日から暁かけて大崎八幡宮に松焚祭を執行され、途も社もうづまるばかりの盛況で……中にも数百人の裸体詣りが神鈴を鳴らして雪を踏んで寒風の中を進むのが威勢よく見られる。之等を暁詣でといふ……』。また、幕末頃の状況を、

嘉永2年（1849）刊の「仙台年中行事大意」（2世十返舎一九。「奥羽一覽道中膝栗毛」第4篇巻之下の内）は次のように記しています。『正月十五日 大崎八幡宮。十四日夜より参詣群集す。この日門松を八幡の社内にて焚失〔たきすつ〕るなり』。昭和に入ってからこの行事が一段と盛んになるさまを、「仙台の方言」（土井八枝。昭和13年刊）は『どんど祭 正月十四日の夕刻より十五日の暁にかけて仙台市八幡町の大崎八幡神社に行はるる祭礼。市民らが松飾の松、床飾の〆縄等を持参して焚く火は夕方から翌朝迄絶えず炎々と燃上って壮観である。近年は一層盛大になり数万の人出がある。』と述べています。

一般にこのような火祭の行事も、稲作儀礼である正月行事の一環でありますので、その起原は遥か古代の農耕の歴史と共に、極めて古いものの一つであります。その間時代的に、地方的にさまざまの変形を遂げながら今日まで残存しているのです。勿論民俗行事ですから本来は旧暦によるものでしたが、明治5年12月3日の改暦を境に、他の民俗行事や祝祭の大部分のものと同様、次第に新暦行事に切替ったのであります。

注(1) 八幡町に鎮座する。延暦20年〔801〕坂上田村麻呂の蝦夷征伐の際、胆沢郡八幡村に八幡宮を勧請〔かんじょう〕し、その後天喜年間源頼義父子が、安倍貞任征伐をするに当り、戦勝を祈って剣と鏑矢〔かぶらや〕を奉納し、文治5年〔1189〕源頼朝の平泉征伐に際しても奉幣しているなど、由緒ある古社であった。その後源義家11世の孫大崎伊豫守家兼が陸奥5郡（遠田・志田・玉造・加美・黒川）を領することになった時、その祖頼義が尊崇した社であるというので、永正8年〔1511〕これを遠田郡八幡村（今の田尻町八幡区御殿崎）に遷祀した。領民等はこれを大崎八幡と尊崇した。天正18年〔1590〕大崎義隆が亡びて伊達氏の所領となってから、政宗は慶長5年これを岩出山に遷し、同7年更に仙台の城北高地に遷し、同9年秋社殿の造営を始め12年落成したので、先に岩出山に遷して置いた米沢成島八幡と共に合祀した。「大崎八幡」とも「米沢八幡」とも呼ぶのはそのためである。また「仙台鹿の子」に『御城府より遠山なる故に遠八幡といふ……』とあるように「遠八幡」ともいわれた。なお、遠田郡田尻の旧地には今も大崎八幡を祀っており、米沢の旧地には成島八幡が現在も祀られている。この時の社殿の内、本殿・拜殿・石之間等は現存最古の桃山式建築として、明治36年国宝に指定された。成島八幡の別当寺は竜宝寺で、米沢以来奉仕しており、仙台遷座後は社東に伽藍を建てて別当した。竜宝寺は真言宗で、一門格に列せられていた。本尊は国宝釈迦如来像である。特にこの寺には准国宝級と称せられた「法宝蔵」があった。25世実政法印が神儒仏に関する図書1万6千4百33巻を収集し、正徳4年〔1714〕8月これを寺の蔵書とするよう上願して許され、自費を以て書庫を建設し、翌5年5月落成した。これを「法宝蔵」と号し、収蔵の書籍を有志の閲覧に供した。徳川時代に於ける図書館の一つで、明治維新後その幾分は散逸したといわれたが、なお大部分が残っていた。ところが惜しいかな、昭和14年3月1

日火災のため焼失してしまった。明治初年の神仏分離の際には、竜宝寺45世永憲は帰正して大崎清美貫寛と改め、大崎八幡の祠官となった。その他の社僧6名も帰正して神職となっている。

注② 王城附近の地をいう。わが国では、歴代の皇居が置かれた大和・山城・河内・和泉・摂津の5か国、即ち5畿内。和泉が河内から分離して分置される以前の奈良時代までは4畿内といった。

古くから支配者貴族階層の本拠地であるので特別優位性のある地域とされた。これに対しその他諸国を「外国」〔げこく〕と呼んだ。この外国〔げこく〕は現代的な意味での外国〔がいこく〕ではない。

注③ 畿内と同じ意味であるが、この場合は近畿地方の略で、京都・大阪・滋賀・兵庫・奈良・和歌山・三重の2府5県の区域。

資料 仙台の年中行事（仙台市産業部編）

郷土の伝承（宮城県教育会編）

仙台の方言（土井八枝）

## 106 「やまい送り」の行事

問 戦前まで「四百四病送れ、送れ」という行事が行われていたそうですが、どのような行事ですか。

答 旧暦3月15日に行われた民俗的な年中行事で、仙台地方では「やまい送り」・「こど」・「こどまつり」・「うめわかのごと」などと称していました。これについて「仙台の方言」（土井八枝）に次のように記されています。

『こど・こどまつり 三月十五日やまいおくりの行事』

『やまいおくり これは「こど」とも言ひ、疫病除の行事である。三月十五日、葉のついた細竹の枝に白や草の餅をませたりして七つ、五つなどつけ、半紙を二つ切にした一枚に「四百四病おくるおくるおくる（……おくれおくれおくれ、とも）」と認めたものを結びつけ「こどは一人でするもんでないから外さ出せや。」と言って門に立てる。大抵は犬などが咬へ去るのであるが、すると疫病をはらったとよろこぶのである。

この餅は「こどもち」「うめわかごとのもち」などいふ。片平丁に通称「ごとわさん」とよぶ政宗公愛馬、牛頭をまつる社があり、三月十五日に祭る。また「うめわかごとのもち」については、謡曲隈田川に人買商人につれられた梅若丸が隅田川のほとりで病死し、遂に「遺言に任せ墓所を構